

「都市色彩の個有性と最適性の研究」

—— 金沢を事例として ——

山 岸 政 雄

森 嘉 紀

はじめに

本研究は、先に調査研究した「色彩景観考・金沢」(本学報第20号1976)及び「金沢都市中心部における色彩環境調査」(本学報第25号・1981)を引き継ぐもので、金沢の環境改善への提案研究である。

その後10余年を経た今日の金沢は、「21世紀金沢の未来像」をマニュアルとして、都市の体質強化と、快適な環境づくりを目指している。

なかでも、都市色彩への関心は快適要因として更に大きなウェイトを持つようになってきた。

そこで本研究では、都市空間における色彩効用を、固有・最適性を視点に後出2.の事例を通じて考察を試みることにした。

事例で通観する主な視点は次の諸点である。まず、都市空間に保有されている写像との関係。

たとえば、朽葉色や蕉茶に伝統都市の感じがあるかとの問いである。また、緑の街金沢は、その緑ゆえに、網りめぐらされた用水路が意識化する。このような都市の指標性と色彩の関係などである。

1. 考察の目的

日本社会が都市化社会に移行を始めたのは、昭和40年代に入ってからである。

以後、今日までの20余年の間は、新しい社会に対応するための模索と自助努力の時代が続いた。この間には、人口の過度集中による住宅不足や、大気汚染、騒音などの公害も発生した。先進世界からは、住宅はうさぎ小屋、公害見本市列島とさえ言われたことも記憶に新しい。

しかしながら、日本の都市は、単一民族に加え、孤島主義に由来するわれ関せずの発展パターンを押し進め、省みることもなく増殖し続けてきた。

最も一般的な発展パターンは、都心の繁華性と、見渡せる限りを都市域とした、地域と都会の混在が引起こす都市増殖の有様である。ドーナツ化あるいはスプロール現象はこの因果説明の証しである。そこには都鄙接触地帯 (urban fringe) 特有の観相も展開され、思いがけぬ情景も展開した。たとえば郊外レストランやパチンコ店、24時間営業ストアなどである。

あるいはまた、昼間は都会人として、夜間は郊外の都市人となるために用意使用される自家用車や電車、バスも都市拡張への関わり要因となった。つまり、利用時の空間が、見られるための意識を増大させるファッションナブルな場として価値を持ったからである。

通勤距離が広がる程に、その多様な欲求補完のエネルギーを担う雇傭が増大し人口集中を加速させた。

欲求補完のエネルギーは見えない産業といわれる情報産業を促し、一巡してデザインされた見えるものとなって都市隆盛の背景を説明する。都市デザイン、建築デザイン、TVなどのマスメディアのデザイン、環境用具やグッズのデザイン、アパレルデザインなど都市人の有様全てに関わる範疇である。

もともと情報産業は人類産業であるが、日本の状況はその採り込み方において、孤独な民族生得的であったところに特異性があったと言える。

結果の延長として、昭和62年現在、未曾有な貿易不均衡さえも生じた。まさに非協調的な孤島の馴成社会によって、都市生態が無秩序に商品化されたことによる付け返り現象である。

都市に住まい暮らす者にとって全てに優先するものは居心地の良し悪しである。商品化された環境を与えられるよりも、風雨が避けて通る

山裾の位置を判じる身体知に関心は傾いている。では都市に廻された付け返りはいつどのような形で見え隠れし出したのであろうか。そこで一例を、およそ20年間に亘る環境問題の流れの中に見据え、まず考察目的の背景を証しておきたい。

昭和39(64) 京都タワー論争により都市は人工的に景観化され得ることを更めて知らされる。大仏次郎氏の古都調和論が建設反対の支柱となった。

41(66) 古都保存法の成立

42(67) 「シビックアメニティズ法」(Civic Amenity Act)がイギリスで成立し、都市の倫理が快適なかけがえのなさをめぐって構造的になってくる。イギリスの実験都市は、バース、ヨーク、チェスター、チチェスターであった。

43(68) 金沢市伝統環境保存条例—部分的ながら自治体が景観保全支援を定めた戦後最初の例。

46(71) 景観論争始まる。この年、ストックホルム国連人間環境会議が開催され当時の大石環境庁長官は、川端康成の「美しい日本の私」を引用しながら環境の保持改善についてアピールを行い大きな反響を得た。

47(72) 都市の色彩、原色の建物に関心を持たれ出した。また一方では、歴史的街並保存や環境権の芽生えがあった。ちなみに、水俣病患者勝訴の判決も人びとに環境と生存についての深い視点を与えた。

48(73) 都市の建造物が映し出すイメージに、表情の無い町や感性をが不足していることを問う時代に入る。

49(74) 都市に情緒の回復を問う意識が、大都市で市民シンポジウムのような形式で盛り上がってくる。この頃、関東一円に酸性雨が降り、環境への関心が総合化されてくる。

また一方において、明治、大正建築への保存気運が高まり「大正・昭和戦前建築、調査小委員会」が日本建築学会内に設けられた。

各地でも古い建築や町並みの保存調査が積極化してくる。金沢では、東山地区が調査された。

50(75) 環境の特性や様相を事前に評価し、その影響を知るためのアセスメント制度に関する諮問が中央公害対策審議会に付された。次第に環境の質を追う体制が論議され出す時期である。

51(76) 行政機関の動きが活発化してくる。国の重要町並み地区保存(妻籠)やビーナスライン(美しが原)をめぐる自然保護と開発の調和論議が目ざされた。

52(77) この時期から、美しい環境づくりへの具体策が急がれるようになった。つまり評論、論議から実行策が選択される。例えば神戸市の建築文化賞の制定がいち早かった。

53(78) 粗悪な建築物や建造物を糾弾するよりも、良識、良好なものを顕彰または表彰することによって優良な都市空間を得ようとしたのがこの年設定された「金沢都市美文化賞」である。

54(79) アセスメント法案国会に提出成立せず。原因は良い環境に賛成する精神規定と事前準備の投資基準の尺度が常識(モラル)的整合に至らなかったためであった。

55(80) (74年に準備された、日本建築学会の戦前建築保存調査が、1万件に及ぶリストアップの中から、「日本近代建築総覧」各地に遺る明治・大正・昭和の建物」として刊行され反響を呼んだ。また、保存と生活の両立を目指して、「明日香保存法案」が成立した。

56(81) 前出(67)のいわゆるアメニティ
……
(Amenity)に関する関心が急浮
上して、その概念をめぐって多く
……
のシンポジウムやフォーラムが
……
開かれた。以下今日まで都市の風
62(87) 格と資を問う論理となった。

2. 事例—香林坊再開発・金沢都市美文化賞建造物をモデルとして

最近、都市の環境改善の方策として、市民の自助努力目標を視覚化して示すことが多くなってきた。「公共の色彩賞」(公共の色彩を考える会)や「手づくり郷土賞」(建設省)などの推賞対象となった建造物群などである。

たとえば、足利市における公共建築物の色彩統一は茶系統でなされた。横浜の関内駅及び横浜市庁舎周辺の色彩演出、大和郡山市の靴工業団地、鹿児島市鴨池ニュータウン、札幌市モモンシティ山の手、仙台駅周辺、東京隅田川の桜橋を含む新景観、倉敷市シンボルロード等続々と環境改善がなされている。当該の事例もその典型的なものである。

いまでは、美しく快適な環境を示さなければ都市そのものの価値が認められなくなっている。

都市における色や彩りも快適要因として欠かせないものとなったのである。

すでに個有色については、単体建築をも含めて、文明や文化のキーワードにされていた例はいくつかあった。例えばアメリカの文明史家、L.マンフォードは、ヨーロッパ中世都市を称えて、赤いシェーナ、黒と白のジェノヴァ、灰色のパリ、色を染め分けたフィレンツェ、そして金のヴェネツィアと見事に要因化している⁽¹⁾

また、単体建築の色彩への関心ですっと注目されつづけてきたのは、近代デザイン運動で名高いW.モリスの「赤い家」(1859)であろう。赤レンガの洗い出し積みである。

20世紀に入ると、ドイツ表現主義の擡頭の中でB.タウトはマグデブルク市を色彩によって機能区分しようと計画した。背景には石造りの無味乾燥都市への反発が大きかったようである。わが国ではどうか。奈良時代の伽藍には丹、黄、

緑青が塗られていた。また鎌倉時代には反動として素朴自然な色彩も多用された。あるいは17世紀中頃の日光東照宮の極彩色は、時代個有の色彩でもあった。

本研究で問題とする現代都市の色彩は、そのスケールにおいて、変化の早土において、組み合わせの複雑さにおいて、技術の質において過去のそれとは比較にならない側面を持っている。

金沢を事例とする検証もその意味では一部素顔との出会い研究である。

3. 結 果

A. 金沢・香林坊再開発地区を中心とする色彩景観(写真1)

金沢の代表的な商業集積地香林坊地区が、全国注視の再開発を行った。ここでは歴史、風土、文化、素材、造形の文法などが一体となって景観を形成し、その合意を市民に求めている。

主たる色彩イメージはレンガ色を基調としている。さらに街灯のようなストリートファニチャーについても同系色の深いこげ茶色(もぐら色)に統一され、街並みが引き締まっていることが読みとれた。

このことは、シャドウカラーの役割と同時に明るいアイボリー調の建物に対しては、アクセントカラーとなっていることを説明している。

再開発地区の周辺は、長町武家屋敷群をはじめとして、金沢が最も象徴されている空間である。既報の10年以前との比較値では、全体として色彩は高彩度突出型ではなく、トーンがよく揃った町の色になってきた。

さらに細かい数値を介して判明できたことは次の3点である。

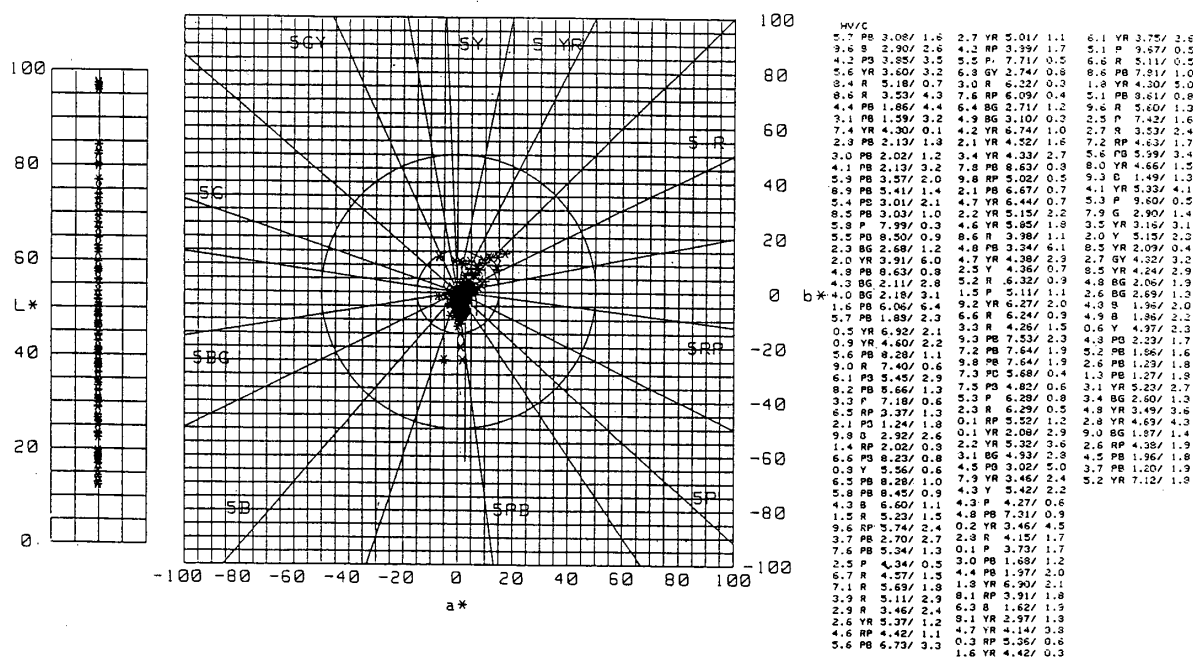
1. 空間の色彩環境に保有されているものに金沢らしい個有なパターンがある。例えば、枯れ葉色の明暗の中が広くトーンがそろって低い様相。

2. 濃い緑が多いだけでなく、用水も隣り合わせて流れ、緑と水、水に緑が映えるといった補完関係の行き届いた色彩景観が展開されている。

3. 金沢の色彩はどのような色彩誘導をかけても変ることのない高い象徴性のあることが読



写真1 (提供—石川県)



金沢・香林坊再開発地区を中心とする色彩景観値(S61-冬)

図1



・再開発の色濃い中心街

写真2



・都市域農村集落の伝統的色彩

写真5



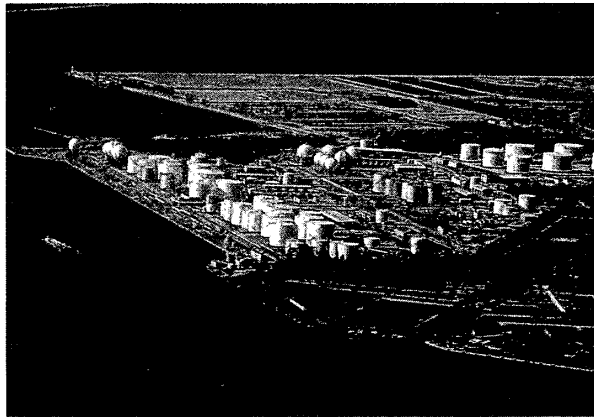
・郊外ニュータウンの色彩 (暖色)

写真3



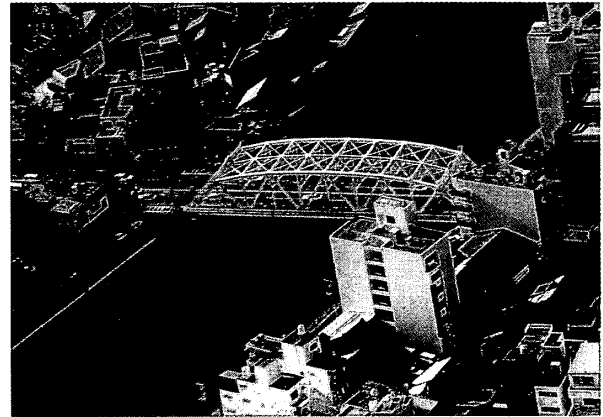
・郊外ニュータウンの色彩 (寒色)

写真6



・港湾、物流基地の人工色

写真4

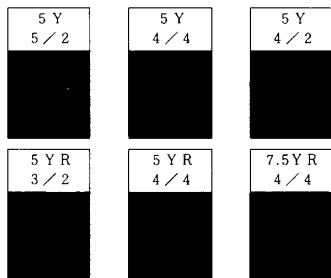


・伝統的市街地のアクセントカラー

写真7

・事例のモデルから抽出された金沢の建物の色彩——1976～1987

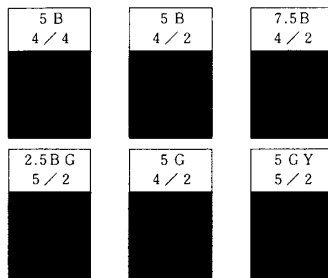
基 底 色 (暖色系)



● 利休茶
(5 Y 5 / 2.5)
鶯 茶
(5 Y R 3.5 / 2)

● 朽 葉
焦 茶
(5 Y R 3.5 / 2)

(寒色系)



● 錆納戸
藍ねずみ
(7.5 B 4.5 / 2)

● 納戸ねず
山 鳩
利休ねず
(3 G 5 / 1)

図2

めた。つまり、北陸の暗い気候風土に根ざさない鮮やかな色彩を持ち込んでも、ここに暮らす人々には鮮かには見えない。日照不足による長波長域への順応不足が景観色を青緑っぽくしているからである。金沢の色彩象徴がよく現われているといえる。

B. 金沢都市美文化賞受賞物件（昭和53年～61年99件・家屋、橋、塔、道、堀、公共建造物）の色彩（図2～図11）

以下のグラフは、 $L^*a^*b^*$ 表色系色度図（CIE 1976）を用い、物件の測色値を計算し、 HV/C 変換を行ったものである。そこから考察された個有性と環境特性は次の諸点である。

1. 平均的使用色数—5色～6色
 - a) 公共建築—単色調、1色～2色及び多色調、7色～8色に2分されている。
 - b) 橋—2色～3色

- c) 商業建築—6色～7色
- d) 個人住宅—単色調、3色～4色及び多色調、9色～12色

2. 色相傾向—Y（おうど・とりのこ・くちなし・きはだ・りきゅうちゃ・やまぶき）Y
R（こはく・きんちゃ・べんがら・たいしや・くちば）GY（こげちゃ・うぐいす・やまばと・わかめ・くさ・こけ・わかめ）
3. 明るさの程度— $V=4.66$
4. 鮮やかさの度合— $C=2.44$, $a^*b^*\pm 9\sim 15$ の間
5. 基底色—セピアゾーン
6. 個有性を支えるその他の色彩様相—アクセントカラーとしての神門の点景色や、桜の花、日影の色、枯れ葉、雪、川面に映る色、石材にみるぬれ色などが色差パターンの検証時に色層位の中にアソートカラーとして見られた。

昭和53年（第1回）

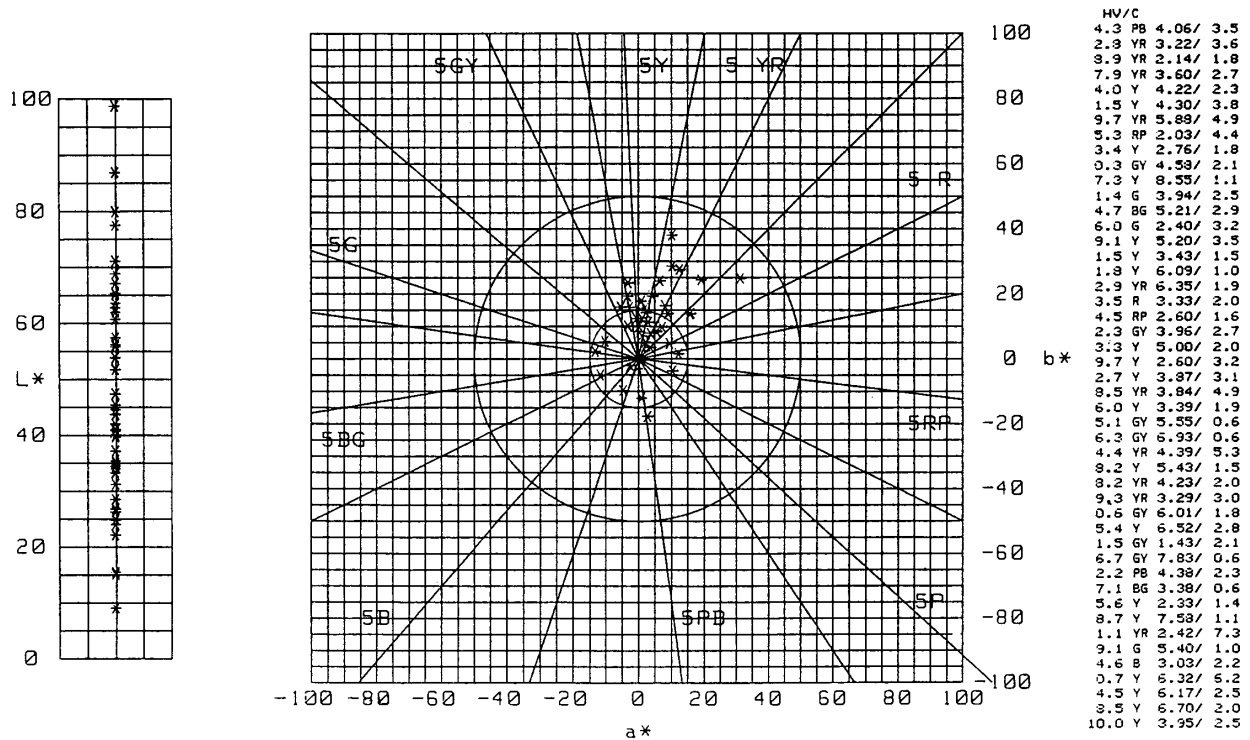


図 3

昭和58年 (第6回)

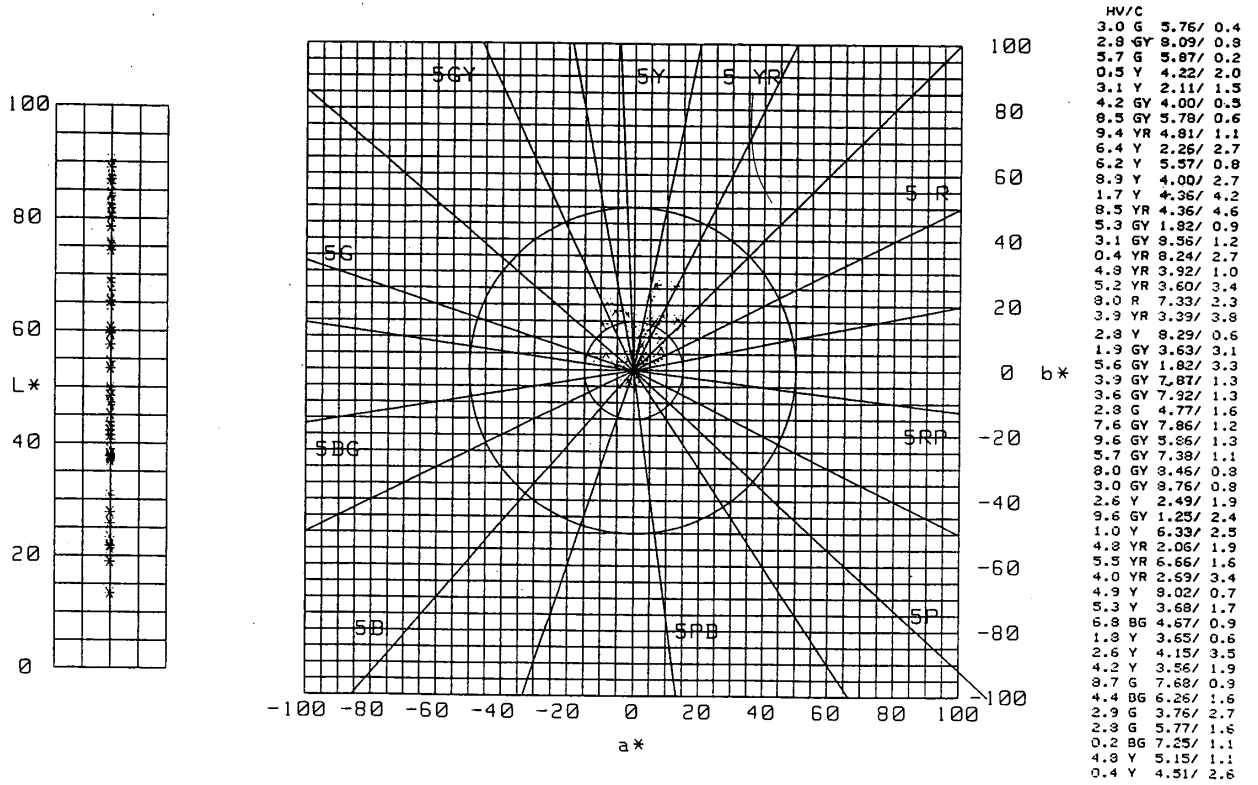


図 8

昭和59年 (第7回)

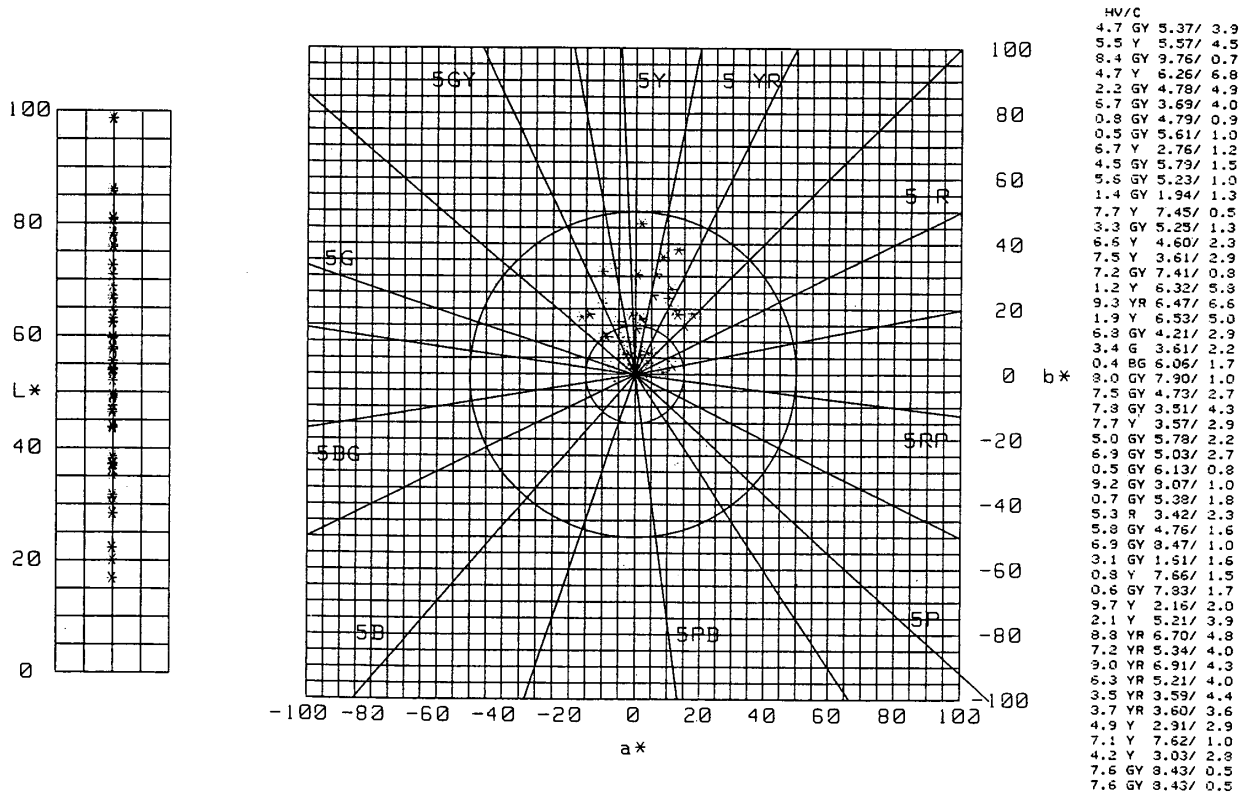


図 9

昭和60年 (第8回)

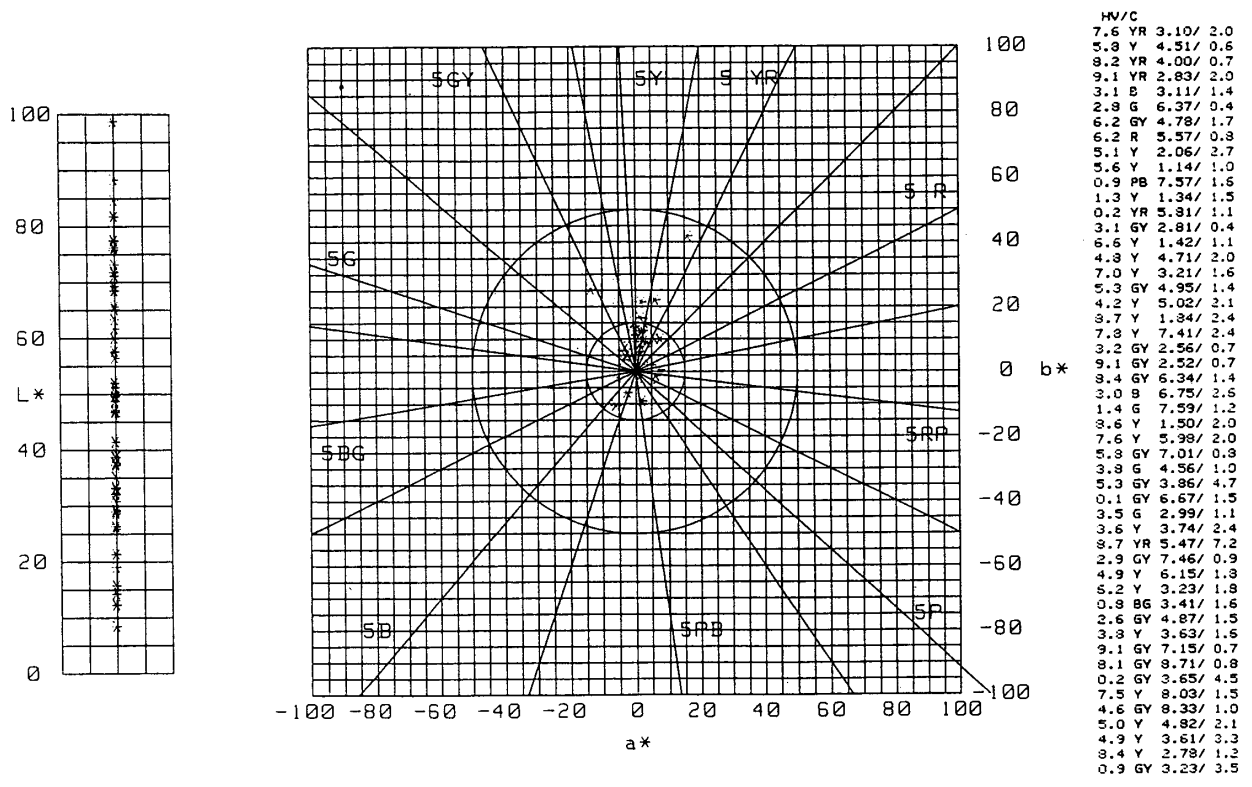


図10

昭和61年 (第9回)

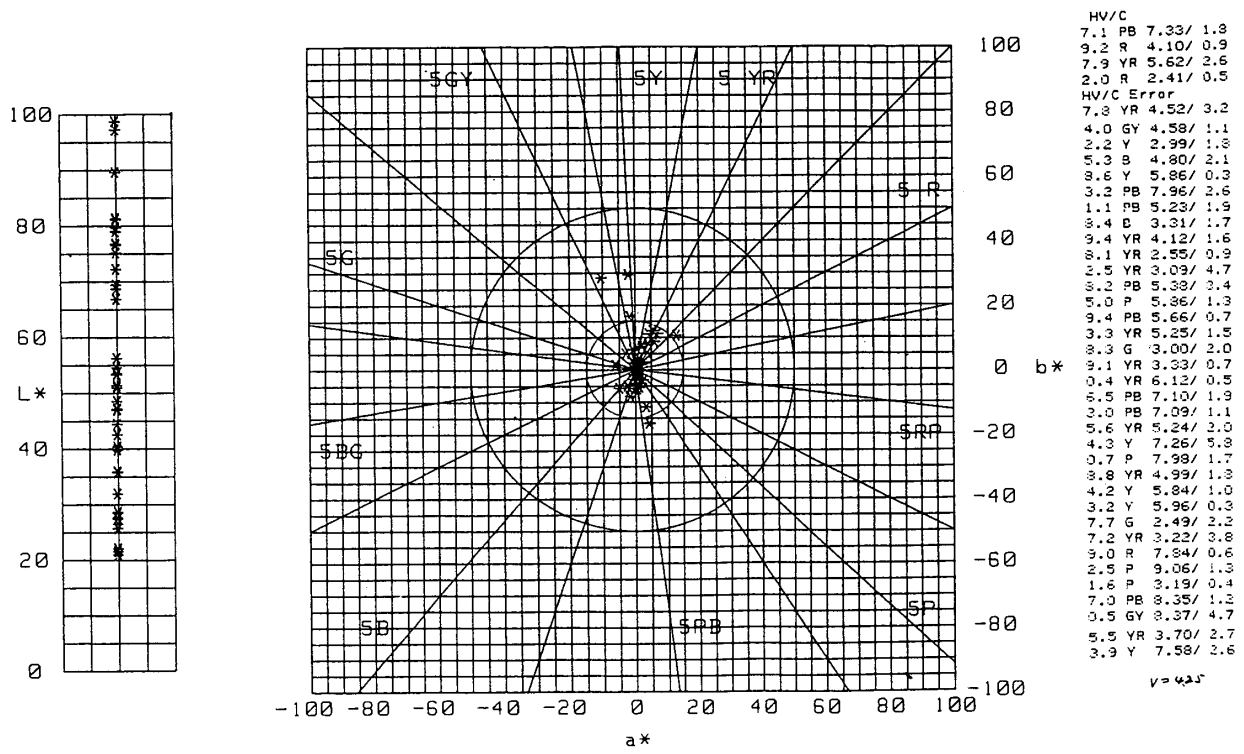


図11

以上の読み替えから、都市の個有色を説明する条件がそろふ。つまり都市様相の明暗や、日照不足の風土、また水と緑の補完関係で都市色彩の現在を説明し得ることである。したがって都市環境改善の予徴尺度としても通用できる。

ただし、いかなる色彩観相も、木色（もくじき）の町並みが褪色から逃れることができぬように、予後の懐に存在していることも証せられた。

生きつづける都市は、その個有色を観察することによって処方箋とすることが可能である。

上記のごとく、都市の成長と都市問題が環境としての見える部分に付け返っていることに気が付いた。そして、都市の色彩も環境を語る視覚言語となって解を呼び起こしていることもわかった。（写真2～写真7）

本研究は、このように揺れ動く都市化現象の中で、伝統都市金沢が試みた都市美運動の一端をモデルとして、色彩言語による最適性と個性の解を求めたものである。（以上）

金沢美術工芸大学共同研究（S.61—当該研究者）の報告。

注(1)L.マンフォード「歴史の都市 明日の都市」新潮社1969

参考文献

「大地と人間」—土木工学のロマン—金沢大学・大学教育開放センター刊

「北陸の風土」同上

川本茂雄「ことばとイメージ」岩波書店1986

平井敏夫「色彩管理と色差計の活用」日本電色工業 S.58

COLOR 73, AIC YORK Bulletin

COLOR 77, AIC TROY NEW YORK Bulletin

COLOR 81, AIC BERLIN Bulletin

COLOR 85, AIC MONTE CARLO MONACO Bulletin